

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 4年 真田桃夏

①学習成果

今回の研修で特に印象に残っていることが2点ある。

1点目は、フィリピンパブで働く女性から伺った話だ。女性は40代で興行ビザで日本に来た世代である。彼女は、「私たちのときは歌もダンスもすごい練習しないと日本に来れなかった。今の子どもたちはそうじゃない。全然厳しくない。」と話した。私は興行ビザが廃止され、パブで働きに来る人が少なくなったと考えていたが、本人たちの感覚とは違うということに驚いた。制度が変わっても、現場や当事者にとっては、制度が意図しないような変化が起こりうるということを知った。

2点目は、支援の仕方についてである。現在名古屋では1週間のうちほとんど毎日炊き出しがあるような状態であるが、当事者であり支援もしているAさんは多すぎると考えており、「まあやりたいんだからしょうがないんだけど」とも言っていた。Aさんは炊き出しでは正確に深く関わらず、生活を立て直す支援ができないことを問題視している。また、生活保護をもらうように持って行っても、その後のフォローも必要であり、中途半端に関わるとその後が大変だとも言っていた。後継者不足も進む中で、一人ひとりに丁寧なフォローをNPOなどの民間団体がどこまでできるのかは難しい問題だと感じた。

②海外での経験

国内での研修のためなし。

③プログラム内容

1日目は在留資格がないフィリピンルーツの子どもが通う学校の見学をした。はじめに学校の先生にお話を聞き、その後授業に参加した。子ども達にダンスを披露してもらい、その後に用意していたクイズと一緒に遊んだ。夜はフィリピンルーツの方が働く職場を見学し、実際に働いている場でお話をお聞きした。

2日目は野宿者を支援している団体を見学した。野宿者の方への支援物資の配布に参加させていただいた。その後、当事者であり支援もされているAさんに野宿者が生活する公園を案内していただき、その後お話を伺った。

④進路への影響について

4回生のため既に進路は決まってしまうっており、今回学んだこととは全く関係のない職種である。しかし、今回学んだことから社会人になってからも自分にはどんなことができるかを考えていきたい。